神戸大学　大学教育研究センター　大学教育研究
第 7 号 （1998年度）　1999年 3月発行：１-19

学生文化形成についての大学間比較に関する研究

岩田弘三（武蔵野女子大学現代社会学部助教授）

学生文化形成についての大学間比較に関する研究

岩田 弘三（武蔵野女子大学）

１．はじめに

現在の大学生は、どのような大学生活を送っているのだろうか。また、彼らは、自分が通う大学をどう評価しているのだろうか。さらに、それらは大学ごとに、どのように異なっているのだろうか。本論では、以上の点に焦点を当てて、分析を進めていくことにする。

ところで、「青年文化」という言葉が存在することからも明らかなように、青年は、大人や子どもとは異なる、独自の文化を享受している。さらに、同じ青年でも、大学生と、そうでない人たちと比べると、「学生文化」と呼ばれる固有の文化を形成している。以上の点は、これまでに行なわれてきた数多くの研究が示唆するところである。しかし、他の集団との対比を問題にする場合の「学生文化」は、大学生集団全体の平均像を示しているに過ぎない。同じ学生文化でも、実際には、個別大学ごとに、その中身には偏差がみられると予想される。たとえば、数多くの「高校生徒文化」研究は、学校ランキングなどをもとにして、個別高校ごとに異なる生徒（下位)文化が形成されていることを、明らかにしている[1)]。さらに、大学生を対象としたものについてみれば、丸山文裕は、チャータリング理論に依拠して、大学ごとに異なる企業選択意識が形成されることを明らかにしている[2)]。チャータリング効果かどうかは別にしても、以上の諸研究を参考にすれば、大学生の日常的な生活パターンや価値観にも、個別大学ごとに差異がみられても、不思議ではない。それでは、学生たちが大学生活のなかで、中心的に行っている活動をもとにすれば、各大学ごとに、どういった学生文化が隆盛を極めているのだろうか。また、それと関連して、学生たちは、自身が在籍する大学を、どう評価しているのだろうか。さらに、それら学生文化や大学評価のあり方に差異が観察されるとすれば、それは、大学の諸特性と何らかの関係をもっているのだろうか。その点を確かめることが、本論の第一の目的である。

しかし、かりに、学生文化や大学評価のあり方に差異が観察されたとしても、その原因としては、2 つの要因が考えられる。第１に、大学入学段階で、すでに各大学は、たとえば学力のみならず、高校時代の生活態度といった面などで、異なるタイプの学生を集めている可能性がある。そして、高校時代の生活態度が、大学での生活態度に、何らかの影響を及ぼすとすれば、高校時代にどのような生活態度を取っていた学生が集中しているかによって、学生文化や学生の大学評価のあり方に、大学差が生じる可能性がある。この解釈にもとづけば、大学入学段階で、すでに学生文化や学生の大学評価のあり方は、相当程度、規定されていることになる。第２の要因は、カレッジ・インパクトの効果である。たとえば、厳密なコホート分析を行なった、アスティンは、大学生活の効果として、学生の価値観などに与える影響は、個別大学環境ごとに異なることを明らかにしている[3)]。この解釈にもとづけば、高校時代の生活態度にかかわらず、個別大学ごとに、学生の態度や価値観には、差異が生じることになる。そこで、本論では、以上２つの要因の関係を明らかにするために、高校時代の生活態度と、学生文化との関連にも、分析を加える。のみならず、大学での学年進行にともない、学生の行動にどのような変化が生じるのかも検討していくことにする。これが、本論の第二の分析視点である。

本論では、主に以上２つの点に焦点を当てて、解析を進めていくことにする。なお、本論で用いるデータは、

武内清が中心となって、1997 年 11 ～ 12 月に実施したアンケート調査をもとにしている。理論枠を含めて、この調査自体に関する詳細は、武内論文[4]を参照いただくとして、ここでは、今回調査対象となった 15 四年制大学、4 短大の主立った特性だけを、表 1 に要約しておく。

表1. 調査対象校のプロフィール

	A大学	B大学	C大学	D大学	E大学	F大学	G大学	H大学	I大学	J大学	K大学	L大学	M大学	N大学	O大学	P大学	Q大学	R大学	S大学
教育年数	4年制	4年制	4年制	4年制	4年制	4年制	4年制	4年制	4年制	4年制	4年制	4年制	4年制	4年制	4年制	短期大学	短期大学	短期大学	短期大学
設置主体	国立	国立	国立	国立	国立	私立	私立	私立	私立	私立	私立	私立	私立	私立	公立	私立	私立	私立	私立
所在地	東京	関東	関東	東北	九州	東京	関西	東京	東京	東京	東京	九州	東海	関東	関東	関東	関西	関東	関東
入学難易度	5	4	3	3	3	5	4	3	3	3	2	2	3	1	—	1	1	1	1
大学全体の総学生数(万人)	16	8	12	8	3	10	25	12	4	3	27	6	4	1	60	—	—	—	—
教員一人当たりの学生数	10	19	15	14	16	23	44	45	44	35	41	20	36	26	—	—	—	—	—
サンプル数(全体)	83	67	87	148	147	201	202	34	68	114	96	119	142	122	74	112	126	139	49
うち男子学生	49	35	31	48	61	52	84	11	35	56	67	50	0	0	33	0	0	0	7
うち女子学生	34	32	56	100	86	149	118	23	33	58	29	69	142	122	41	112	126	139	42

表注）　入学難易度：5＝65以上、4＝64～60、3＝59～55、2＝54～50、1＝49以下（代ーホゼミナール調べ）。
総学生数、教員一人当たり学生数は、『大学ランキング'98』、朝日新聞社による。

2．大学生活で重視している活動

まず、現在の大学生は、どのような活動を中心に据えて、大学生活を送っているのかをみてみよう。今回のアンケート調査では、表 2 に示した 7 項目について、「大部分」、「かなり」、「少し」比重を占めている、「ほとんどなし」の 4 段階評価で、質問を行った。単純集計の結果をもとにして、学生全体の状況をみれば、もっとも中心的な活動は、「友人との交遊」である（この活動が大学生活のなかで「大部分」または「かなり」比重を占めている、と応えた学生の比率は、 66.7 %）。ついで、「学業・勉強」（以下、同様の比率は、47.7 %）、「趣味」（45.9 %）、「アルバイト」（43.9 %）とつづき、5 番目に「異性（恋人）との交際」（32.6 %）がくる。今回の調査結果では、「サークル」は、予想したより重点度が低かった（27.8 %）。また、資格取得などを目指し、大学の授業と並行して専門学校に通う「ダブルスクール」は、一時評判になったが、今回の調査結果をみる限り、この種の活動に力を入れている学生は、ごく少数者である（4.4 %）。

なお、表 2 から分かるように、以上 7 項目については、無相関な状態にあった。それゆえ、以下の分析では、それぞれ独立した項目として扱うことにする。

表2. 大学生活で重視している活動の相関

	勉強	ﾀﾞﾌﾞﾙｽｸｰﾙ	ｻｰｸﾙ	ｱﾙﾊﾞｲﾄ	趣味	友人
ﾀﾞﾌﾞﾙｽｸｰﾙ	.112					
ｻｰｸﾙ	.004	-.040				
ｱﾙﾊﾞｲﾄ	-.128	-.022	-.053			
趣味	-.014	-.008	.044	-.025		
友人	-.072	-.005	.111	.105	.247	
異性	-.106	-.001	.102	.166	.033	.219

3．学生による大学評価

つぎに、学生が行った、自身の通う大学に対する評価についてみてみよう。今回のアンケート調査で、この点

に関する質問項目は、表3に示した 19 項目が、それに該当する。具体的にいえば、「おもしろい授業があるか」、「広い知識や専門知識が得られるか」、「少人数、ゼミ形式の授業があるか」、「先生が授業に熱心であるか」、「授業全般に満足しているか」。さらには、「校舎・教室」、「図書館」、「食堂」、「購買部」、「部やサークル活動の場、部室」、「大学周辺の環境」、「学科やクラスの友人関係」、「サークルの人間関係」、「先生との関係」、「大学職員の対応」、「大学全体の雰囲気」、「今の学科に入ったこと」、「今の大学に入ったこと」に満足しているかどうか、について5段階評価で聞いた質問項目である。

表3. 大学評価についての相関

	今の大学に入ったこと	今の学科に入ったこと	雰囲気	校舎教室	図書館	食堂	購買部	部室	周辺環境	おもしろい授業	広い知識	専門知識	ゼミ形式	先生熱心	授業満足	学科の友人関係	サークルの人間関係	先生との関係
今の学科に入ったこと	.699																	
雰囲気	.584	.429																
校舎教室	.225	.163	.359															
図書館	.259	.166	.344	.456														
食堂	.200	.143	.298	.383	.370													
購買部	.225	.125	.292	.287	.410	.589												
部室	.156	.127	.224	.266	.263	.222	.299											
周辺環境	.348	.218	.385	.340	.297	.243	.310	.261										
おもしろい授業	.381	.382	.274	.216	.113	.105	.073	.085	.164									
広い知識	.342	.343	.266	.216	.116	.091	.071	.114	.197	.555								
専門知識	.301	.333	.217	.113	.090	.066	.051	.087	.117	.420	.526							
ゼミ形式	.195	.123	.200	.172	.195	.115	.082	.105	.114	.199	.175	.187						
先生熱心	.216	.211	.223	.210	.141	.100	.065	.131	.136	.374	.360	.350	.285					
授業満足	.442	.423	.402	.243	.172	.146	.093	.135	.211	.566	.516	.402	.238	.545				
学科の友人関係	.256	.294	.252	.056	.117	.083	.053	.053	.096	.151	.128	.193	.040	.144	.203			
サークルの人間関係	.313	.248	.247	.082	.110	.115	.124	.166	.151	.153	.105	.128	.104	.110	.182	.245		
先生との関係	.252	.294	.270	.137	.069	.112	.017	.112	.088	.302	.245	.280	.214	.377	.396	.269	.208	
職員の対応	.198	.162	.343	.284	.238	.221	.199	.163	.180	.181	.198	.141	.126	.293	.278	.112	.093	.336

ここでもまず、単純集計の結果をもとに、大学生全般の大学評価の様子を示しておこう。第1に、今回は、校舎・教室、図書館、食堂、購買部、部室といった5項目について、大学の施設設備に対する満足度を聞いている。しかし、図書館を除けば、他の施設設備は、全て満足度が低い（校舎・教室に満足している学生は 30.3 %に対し、不満足者は 47.3 %、同様に図書館では 48.1 %に対し 29.1 %、食堂 20.9 %に対し 52.6 %、購買部 26.3 %に対し 43.3 %、部室 11.2 %に対し 39.7 %）。また、大学の周辺環境に対する評価も低い（34.4 %に対し 43.8 %）。第2に、おもしろい授業があり（肯定者 55.1 %に対し否定者 22.6 %、以下同じ）、広い知識（47.3 %と 18.7 %）や専門知識（62.1 %と 12.6 %）が得られ、少人数、ゼミ形式の授業がなされ（51.9 %と 28.4 %）、先生が授業に熱心である（38.8 %と 17.0 %）と評価しているにもかかわらず、授業全般に対する満足度は低い（25.3 %と 39.2 %）。（この結果をどう解釈するかは、今後の課題となる。）第3に、大学職員の対応についても満足度は低い（14.4 %と 37.0 %）。しかし、以上のような不満はみられるものの、第4に、人間関係については、学科やクラス（65.7 %と 11.5 %）、部やサークル（36.8 %と 8.8 %）、先生（23.4 %と 18.9 %）、いずれに対しても満足しており、大学全体の雰囲気（32.3 %と 28.6 %）、さらには今の学科（59.8 %と 16.2 %）、大学（55.3 %と 20.3 %）に入ったことにも満足している。つまり、大学生活全体に対しては、満足している学生が大半を占めている。

つぎに、大学評価に関する、これら 19 項目の関係をみていこう。まず、それらの相関関係を示したものが、表3である。なお、表では、0.4 以上の強い相関がみられるものには濃いめの網かけを、0.3 以上の弱い相関がみられるものには薄めの網かけを、行っておいた。この結果を要約するために、主成分分析を行ってみた。表 4

から分かるように、全部で 4 つの成分が抽出された。それぞれの成分を構成する項目は、網かけ表示で示しておいた。第 1 成分は、大学の「設備環境」に関する成分である。同様に、第 2 成分は「授業」関連、第 3 成分は「友人関係」、第 4 成分は「教職員」関係の成分である、と考えられる。なお、大学や学科に対する満足度、つまり大学生活全般の満足度は、授業関連因子（第 2 成分)とも結びつきをもつが、どちらかといえば友人関係因子（第 3 成分）によって規定される部分が大きい、という結果が出ている。

以上の結果をもとに、上の 4 成分については、濃いめの網かけで表示されている数字を重みとして、それら数字に対応する変数の、合成得点を算出した（たとえば、授業に関連する第 2 成分については、（0.751 ＊「おもしろい授業」＋ 0.803 ＊「広い知識」＋ 0.699 ＊「専門知識」＋ 0.454 ＊「先生が授業に熱心」＋ 0.651 ＊「授業全般に対する満足度」）／（0.751 ＋ 0.803 ＋ 0.699 ＋ 0.454 ＋ 0.651）。以下、大学評価に関しては、それら合成得点で求められた 4 成分を中心に、分析を進めていくことにする。

表4. 大学評価についての主成分分析

主成分得点

	主成分			
	設備環境	学業	友人関係	教職員
おもしろい授業	.082	.751	.127	.159
広い知識	.102	.803	.045	.092
専門知識	-.001	.699	.129	.126
ゼミ形式	.178	.265	-.014	.373
先生熱心	.070	.454	.009	.622
授業満足	.123	.651	.245	.372
校舎教室	.655	.175	-.017	.197
図書館	.699	.051	.089	.092
食堂	.711	-.019	.054	.110
購買部	.752	-.027	.065	-.014
部室	.484	.051	.067	.121
周辺環境	.547	.173	.223	-.058
学科の友人関係	-.037	-.006	.632	.233
サークルの人間関係	.093	-.006	.596	.113
先生との関係	-.044	.190	.354	.684
職員の対応	.320	.017	.116	.634
雰囲気	.457	.221	.533	.160
今の学科に入ったこと	.141	.446	.668	-.068
今の大学に入ったこと	.293	.409	.666	-.087

因子抽出法: 主成分分析
回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

4．高校時代に行った活動

ところで、本稿では、高校時代に行った活動と、大学生活で重視している活動の連続性についても、分析を加える予定である。そこで、その予備分析として、高校時代に行った活動の相関をみたものが、表 5 である（ここでも、0.4 以上の強い相関がみられるものには濃いめの網かけを、0.3 以上の弱い相関がみられるものには薄めの網かけを、行っておいた）。さらに、この結果を要約するために行った、主成分分析の結果を示したものが、表 6 である。この表から分かるように、高校時代に行った活動についても、全部で 4 つの成分が抽出された。表 4 と同様に、それぞれの成分を構成する項目は、網かけ表示で示しておいた。第 1 成分は、「交遊関係」に関する因子と呼ぶことにしよう。また、第 2 成分は「奉仕活動」、第 3 成分は「受験勉強対アルバイト」、第 4 成分は「趣味」に関する因子と呼ぶことにする。以上の結果をもとに、第 1 、第 2 、第 3 成分については、網かけ表示がなされている数字を重みとして、それら数字に対応する変数の、合成得点を算出した。なお、第 3 成分を構成する項目は、受験勉強とアルバイトの 2 つであるが、主成分分析の結果から判断する限り、この 2 つの活動は、お互いに逆方向に作用していることが分かる。つまり、受験勉強志向が強いほど、アルバイト志向が

弱くなる、といった関係にある。さらに、高校時代の活動と、大学時代の活動のあいだに観察される連続性をみていく場合、大学時代の「勉強志向」や、「アルバイト志向」にそれぞれ対応する項目として、高校時代の「受験勉強志向」と、「アルバイト志向」は独立させておいた方が、有効である。それゆえ、高校時代に行った活動としては、交遊関係、奉仕活動、アルバイト、受験勉強、趣味を、5つの軸に据えて、以下の分析を行っていくことにした。

表5. 高校時代に行った活動の相関

	部活動	友人との交遊	異性関係	趣味	読書	受験勉強	生徒会活動	アルバイト
友人との交遊	.213							
異性関係	.171	.356						
趣味	.169	.277	.205					
読書	.024	.056	-.039	.328				
受験勉強	-.003	-.036	-.066	-.024	.065			
生徒会活動	.166	.156	.125	.178	.148	.125		
アルバイト	-.065	.127	.244	.081	-.025	-.189	.041	
ボランティア	.063	.116	.176	.178	.108	.016	.294	.181

表6. 高校時代に行った活動についての主成分分析

主成分得点

	主成分			
	交遊	奉仕活動	アルバイト－受験勉強	趣味
部活動	.702	-.005	-.300	.039
友人との交遊	.706	.077	.151	.147
異性関係	.632	.206	.362	-.088
趣味	.356	.100	.109	.717
読書	-.122	.108	-.082	.860
受験勉強	-.077	.398	.630	-.075
生徒会活動	.189	.721	-.163	.125
アルバイト	.028	.239	.776	-.038
ボランティア	.028	.752	.240	.100

因子抽出法: 主成分分析
回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

5．大学別にみた「大学生活で重視している活動」と「大学評価」

それでは、大学別にみた場合、「大学生活で重視している活動」や「大学評価」には、何らかの相違がみられるのであろうか。まず、表7で、「大学生活で重視している活動」からみていこう。この表は、学生にとって、種々の活動が大学生活のなかで、どの程度の比重をしめているのか、その平均値を大学ごとに示したものである。数値は、1～4の振れ幅で、値が高くなるほど、学生たちの、その活動に対する重視度が高いことを表している[5)]。なお、表には、大学の属性を表す指標として、今回の調査から得られた「男性比率」、「現役比率」、「第1志望入学者（大学、学部・学科とも）比率」、「自宅通学者比率」、「父学歴」、「母学歴」の大学別平均値を併せて表示してある（父母学歴については、1＝中学校卒、2＝高等学校卒、3＝短期大学・専門学校卒、4＝四年制大学以上卒）。また、今回の調査サンプル全体での平均より、高い数値を示した項目には、その数値の下にアンダーラインを引いておいた。表からは、つぎのことがみてとれる。第1に、学生が「勉強・学業」に比重を置く傾向は、全ての短大において弱い。逆に、「友人」、「異性」関係に比重を置く傾向は、全ての短大にお

いて強い。第２に、全ての国公立大学で、「ダブルスクール」に比重を置く傾向が弱くなっており、「ダブルスクール」を重視する傾向は、相対的に一部の私立大学に特有の現象となっている。第３に、「サークル」に比重を置く傾向は、全ての国立大学で強く、全ての短大で弱い。第４に、「アルバイト」については、一校を除いて、全ての短大で強くなっている。つまり、短大では共通して、勉学やサークル活動より、友人、異性関係、アルバイトを中心とした学生文化が形成されていることが分かる。なお、短大生のほぼ全ては女子学生である。したがって、短大に共通した学生文化とここで述べたものは、女子学生文化であるとも考えられる。しかし、４年制大学のなかにも、女子大学がいくつか含まれている（表では男性比率が０％の、Ｍ大学とＮ大学）。これら２つの女子大学でも、サークル活動は低調であり、アルバイト文化が優勢を占めている。この点は、短大の学生文化との一致がみられる。しかし、勉強文化、ダブルスクール文化も繁栄を極めている。その意味で、これら２つの女子大学が有する学生文化は、短大の学生文化と完全に一致するわけではない。だから、先の特徴は、短大に特有の学生文化である、と考えられる。一方、４年制大学についてみれば、国立大学で、アルバイトより、サークル文化が繁栄している、といった特徴を除けば、個別大学ごとに特有の学生文化が発展している。

表7. 学生文化と大学の属性

		学生文化							大学の属性					
大学		勉強	ダブルスクール	サークル	アルバイト	趣味	友人	異性	男性比率	現役比率	第一志望	自宅通学率	父親	母親
国立4年制A	N	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	80	80
	平均値	2.78	1.11	2.52	2.02	2.52	2.64	1.95	.59	.76	.76	.41	3.25	2.77
	標準偏差	.78	.38	1.06	.80	.83	.76	1.07	.49	.43	.43	.49	1.04	.90
国立4年制B	N	67	66	67	67	67	67	67	67	67	67	67	63	63
	平均値	2.39	1.09	1.99	2.55	2.58	2.79	2.30	.52	.57	.46	.25	3.14	2.57
	標準偏差	.78	.34	1.11	.74	.80	.75	1.18	.50	.50	.50	.44	1.09	.91
国立4年制C	N	87	87	86	87	86	87	87	87	87	87	87	80	80
	平均値	2.31	1.01	2.28	2.28	2.44	2.77	1.91	.36	.71	.46	.30	3.16	2.56
	標準偏差	.70	.11	1.01	.84	.89	.71	.95	.48	.46	.50	.46	1.02	.82
国立4年制E	N	147	135	146	147	147	147	146	147	147	147	147	129	129
	平均値	2.30	1.13	2.23	2.27	2.41	2.90	2.05	.41	.86	.61	.37	2.77	2.27
	標準偏差	.67	.40	1.15	.89	.89	.77	.97	.49	.35	.49	.49	1.08	.73
国立4年制D	N	148	143	148	148	148	147	148	148	148	146	148	135	138
	平均値	2.36	1.12	2.01	2.39	2.47	2.79	2.10	.32	.82	.35	.40	2.50	2.23
	標準偏差	.74	.35	1.11	.80	.75	.69	.95	.47	.38	.48	.49	1.04	.84
私立四年制F	N	200	200	200	201	199	200	201	201	201	200	201	195	195
	平均値	2.76	1.21	2.44	2.37	2.63	2.91	2.16	.26	.76	.63	.67	3.53	2.99
	標準偏差	.80	.56	1.07	.83	.81	.69	1.04	.44	.43	.48	.47	.87	.87
私立四年制G	N	202	202	200	202	202	201	201	202	202	202	202	192	188
	平均値	2.46	1.24	1.86	2.38	2.61	2.72	2.01	.42	.73	.56	.71	2.87	2.49
	標準偏差	.74	.58	1.08	.87	.82	.71	1.06	.49	.45	.50	.45	1.13	.90
私立四年制H	N	34	34	34	34	34	34	34	34	34	34	34	31	30
	平均値	2.53	1.41	1.79	2.62	2.62	2.79	1.85	.32	.65	.29	.68	3.45	2.90
	標準偏差	.83	.74	.91	.92	.92	.59	.78	.47	.49	.46	.47	.93	.76
私立四年制I	N	68	67	68	68	68	68	68	68	68	68	68	64	63
	平均値	2.53	1.16	2.46	2.32	2.71	2.74	1.96	.51	.60	.26	.76	3.13	2.57
	標準偏差	.84	.51	1.15	.84	.79	.66	1.07	.50	.49	.44	.43	1.12	.87
私立四年制J	N	114	112	114	114	114	114	114	114	114	114	113	101	104
	平均値	2.49	1.25	1.91	2.38	2.78	2.76	1.96	.49	.79	.34	.65	2.93	2.49
	標準偏差	.73	.58	1.09	1.05	.80	.72	.98	.50	.41	.48	.48	1.10	.87
私立四年制K	N	96	95	94	96	98	95	96	96	96	95	96	86	85
	平均値	2.59	1.21	2.10	2.04	2.68	2.83	2.05	.70	.52	.17	.48	2.92	2.68
	標準偏差	.87	.62	1.07	.98	.88	.78	1.10	.46	.50	.38	.50	1.04	.82
私立四年制L	N	119	117	119	119	118	119	119	119	119	118	119	102	101
	平均値	2.61	1.09	1.91	2.18	2.60	2.71	1.97	.42	.64	.29	.49	2.68	2.43
	標準偏差	.79	.36	1.08	1.00	.85	.68	.99	.50	.48	.45	.50	1.03	.78
私立4年制M	N	142	141	142	141	142	142	142	142	142	142	142	132	134
	平均値	2.67	1.25	1.26	2.52	2.30	2.84	1.89	.00	.99	.46	.96	2.98	2.56
	標準偏差	.78	.55	.57	.79	.82	.65	.97	.00	.08	.50	.18	1.06	.78
私立4年制N	N	122	119	122	122	121	122	122	122	122	121	122	115	114
	平均値	2.93	1.26	1.34	2.45	2.27	2.75	2.11	.00	.98	.49	.61	2.92	2.34
	標準偏差	.78	.59	.71	.95	.68	.69	1.10	.00	.16	.50	.49	1.04	.64
私立短大P	N	112	109	112	112	111	112	112	112	112	111	112	106	103
	平均値	2.38	1.30	1.46	1.88	2.36	2.88	2.10	.00	.99	.33	.71	2.85	2.41
	標準偏差	.75	.59	.80	.82	.78	.67	.98	.00	.09	.47	.46	1.06	.69
私立短大Q	N	125	120	123	126	121	126	126	126	126	126	126	111	112
	平均値	2.21	1.19	1.22	2.34	2.30	2.94	2.06	.00	.98	.52	.62	2.41	2.18
	標準偏差	.85	.49	.54	1.05	.84	.70	1.06	.00	.13	.50	.49	1.02	.70
私立短大R	N	139	130	139	138	138	139	138	139	139	139	139	126	127
	平均値	2.06	1.07	1.74	2.61	2.26	3.17	2.32	.00	.96	.79	.94	2.20	2.12
	標準偏差	.55	.31	.84	.92	.80	.79	.92	.00	.19	.41	.25	.87	.61
公立O	N	71	49	61	60	67	65	61	74	61	63	74	49	45
	平均値	2.62	1.78	1.30	1.83	2.58	2.51	1.98	.45	.15	.44	.78	2.37	2.22
	標準偏差	.76	1.18	.74	1.06	.89	.77	1.02	.50	.36	.50	.41	1.22	1.02
私立短大S	N	49	47	49	49	49	49	49	49	49	48	49	44	45
	平均値	1.98	1.21	1.31	2.61	2.65	3.06	2.41	.14	.98	.33	.86	2.64	2.16
	標準偏差	.75	.46	.68	.93	.83	.85	1.08	.35	.14	.48	.35	.97	.60
合計	N	2125	2056	2107	2114	2111	2117	2114	2130	2117	2111	2129	1941	1936
	平均値	2.48	1.20	1.87	2.32	2.50	2.83	2.06	.29	.79	.48	.62	2.87	2.47
	標準偏差	.79	.53	1.05	.92	.83	.73	1.02	.45	.41	.50	.49	1.09	.83

なお、表に示した「男性比率」、「現役比率」、「第１志望入学者比率」、「自宅通学者比率」、「父学歴」、「母学歴」、といった大学の属性と、大学で優勢な学生文化とのあいだには、目立った関連はみつけられなかった。

ところで、高校生徒文化についての、いくつかの研究によれば、高校の学校階層上の位置が上がるほど、勉強文化志向が強くなるなど、学校階層とそこで形成される生徒文化のあいだには、関係があるとされる[6]。その知見をもとにすれば、大学についても、たとえば入学偏差値が高くなるほど、勉強志向の強い学生文化が形成されるのではないか、と予想される。そこで、大学の入学偏差値と、学生文化の関係を学年別にみたものが、図１である。この図は、基本的には、表７の数字を、学年別に産出し直し、それを縦軸に、さらに横軸には各大学の入学偏差値を配置し、各大学の位置をプロットしたものである。下級学年とは、４年制大学の場合は１～２年生、短大の場合は１年生のことである。同様に、上級学年とは、４年制大学の場合は３～４年生、短大の場合は２年生のことである。図からは、下級学年では、偏差値が高い大学ほど、サークル活動文化が盛んであることがみてとれる。しかし、上級学年になると、その関係は弱まる傾向がみられる。さらに、サークル以外の活動については、大学の入学偏差値とのあいだに、強い関連性はみられない。

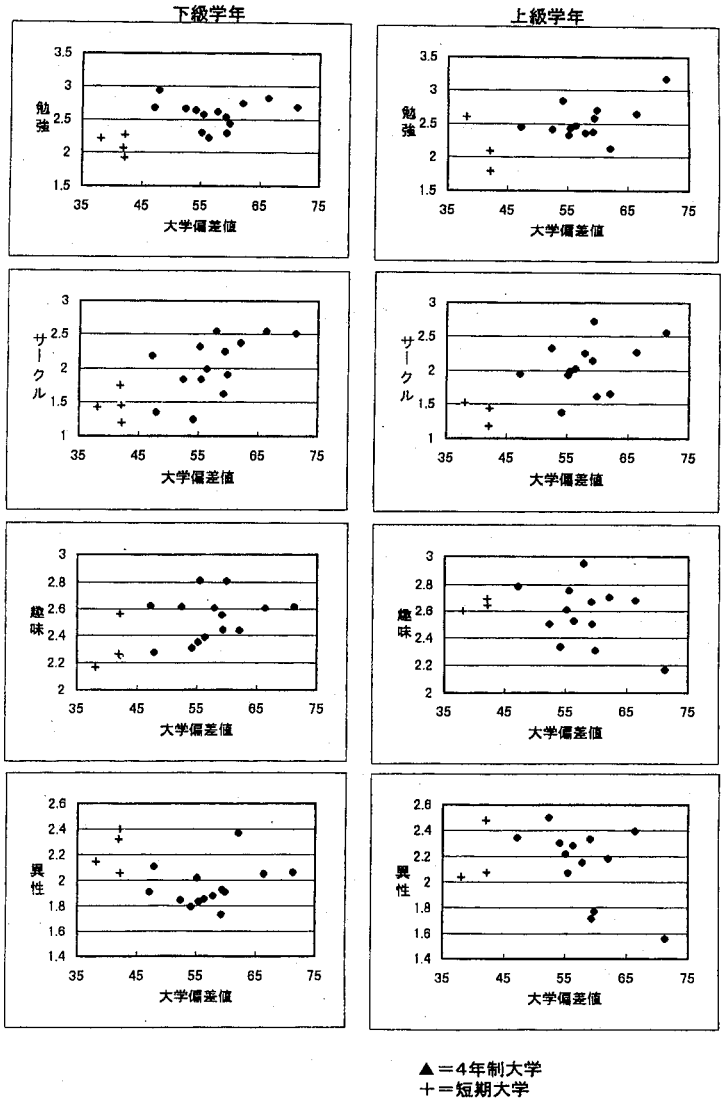
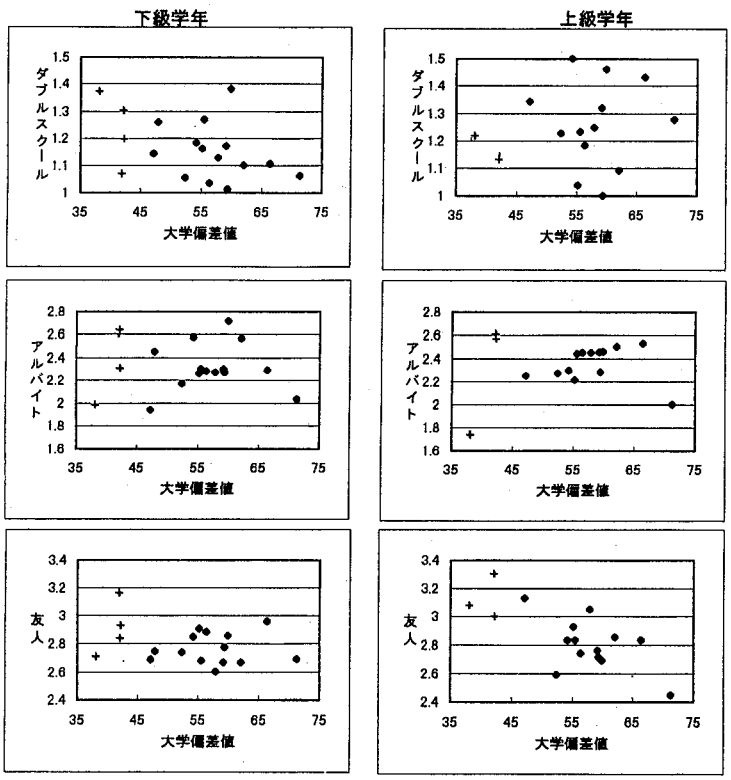


図1. 大学の入学偏差値と学生文化



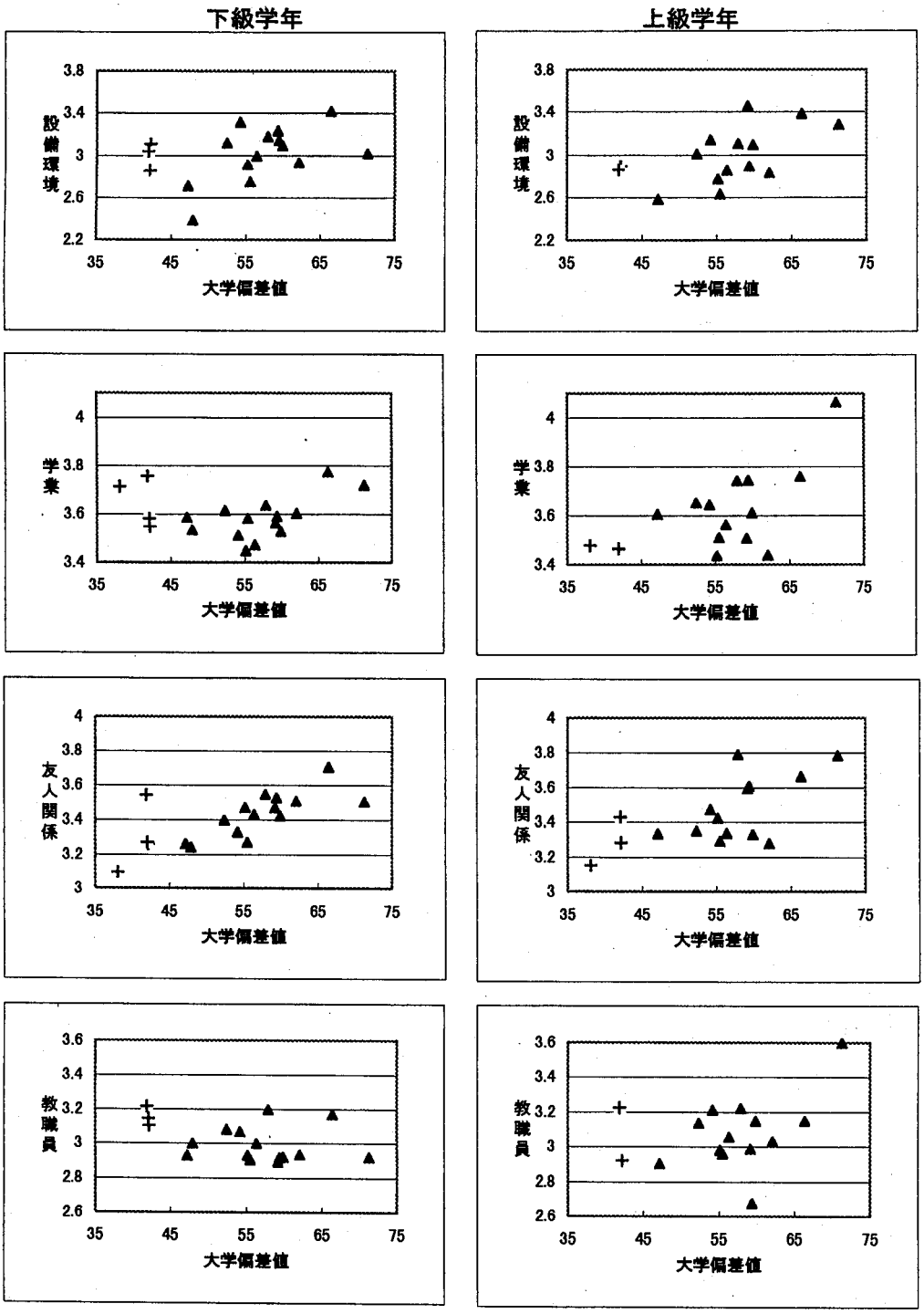
大学の入学偏差値は、1998年の学研調べ。

図1. 大学の入学偏差値と学生文化(つづき)

ついで、表 8 は、個々の項目について学生が、自分の在籍する大学を、どの程度、評価しているのか、その平均値を大学ごとに示したものである。数値は、1～5の振れ幅で、値が高くなるほど、学生たちのその項目に対する評価が高いことを表している。大学評価に関しては、4年制大学と短大のあいだに、さらには、国立大学と私立大学のあいだに、目立った差異は観察されなかった。同様にここでも、表 8 に示したような、今回、指標とした大学の属性と、大学評価とのあいだに目立った関連はみつけられなかった。それでは、大学の入学偏差値とのあいだには、何らかの関係がみられるのだろうか。この点を、図2で学年別にみておこう。図の見方は、図 1 と同様である。下級学年については、教職員への評価を除けば、偏差値が高い大学ほど、いずれの面でも大学評価が高くなる傾向がみられる。しかし、上級学年になると、その関係は弱まり、大学偏差値と大学評価とは無相関に近い状態になる。つまり、相対的に入学して間もない学年の大学評価は、自分が入学した大学の序列（偏差値）によって左右される度合いが大きい。しかし、大学生活を積み上げていくうちに、それは偏差値の高低を脱したものへと、変化していく。言い換えれば、個別大学ごとにカレッジ・インパクトの様相は異なることを示している、と思われる[7]。要約すると、学校序列が後々まで生徒・学生文化に持ち越されない、といった意味で、大学学生文化は、高校生徒文化と形成のされ方が異なることが示唆される。

表8. 大学別にみた大学評価

大学		大学評価				大学の属性					
		設備環境	学業	友人関係	教職員	男性比率	現役比率	第一志望	自宅通学率	父親	母親
国立4年制A	N	83	83	83	83	83	83	83	83	80	80
	平均値	3.08	3.79	3.56	3.07	.59	.76	.76	.41	3.25	2.77
	標準偏差	.42	.44	.42	.45	.49	.43	.43	.49	1.04	.90
国立4年制B	N	65	66	65	67	67	67	67	67	63	63
	平均値	2.86	3.51	3.39	2.98	.52	.57	.46	.25	3.14	2.57
	標準偏差	.39	.38	.54	.44	.50	.50	.50	.44	1.09	.91
国立4年制C	N	85	86	84	85	87	87	87	87	80	80
	平均値	3.12	3.60	3.53	2.90	.36	.71	.46	.30	3.16	2.56
	標準偏差	.30	.43	.39	.43	.48	.46	.50	.46	1.02	.82
国立4年制E	N	143	145	143	146	147	147	147	147	129	129
	平均値	2.88	3.45	3.46	2.94	.41	.86	.61	.37	2.77	2.27
	標準偏差	.41	.42	.49	.41	.49	.35	.49	.49	1.08	.73
国立4年制D	N	148	145	147	148	148	148	146	148	135	138
	平均値	2.91	3.53	3.37	3.03	.32	.82	.35	.40	2.50	2.23
	標準偏差	.39	.35	.45	.40	.47	.38	.48	.49	1.04	.84
私立四年制F	N	199	200	197	199	201	201	200	201	195	195
	平均値	3.40	3.76	3.69	3.16	.26	.76	.63	.67	3.53	2.99
	標準偏差	.38	.36	.43	.38	.44	.43	.48	.47	.87	.87
私立四年制G	N	199	201	198	200	202	202	202	202	192	188
	平均値	3.33	3.54	3.53	2.94	.42	.73	.56	.71	2.87	2.49
	標準偏差	.36	.43	.44	.43	.49	.45	.50	.45	1.13	.90
私立四年制H	N	32	34	32	34	34	34	34	34	31	30
	平均値	3.09	3.56	3.38	3.01	.32	.65	.29	.68	3.45	2.90
	標準偏差	.39	.40	.48	.46	.47	.49	.46	.47	.93	.76
私立四年制I	N	68	67	66	68	68	68	68	68	64	63
	平均値	3.15	3.67	3.62	3.20	.51	.60	.26	.76	3.13	2.57
	標準偏差	.34	.39	.39	.37	.50	.49	.44	.43	1.12	.87
私立四年制J	N	112	114	110	113	114	114	114	113	101	104
	平均値	2.68	3.54	3.28	2.93	.49	.79	.34	.65	2.93	2.49
	標準偏差	.37	.34	.42	.39	.50	.41	.48	.48	1.10	.87
私立四年制K	N	93	95	91	95	96	96	95	96	86	85
	平均値	2.66	3.59	3.29	2.92	.70	.52	.17	.48	2.92	2.68
	標準偏差	.46	.49	.47	.51	.46	.50	.38	.50	1.04	.82
私立四年制L	N	119	118	119	118	119	119	118	119	102	101
	平均値	3.10	3.63	3.39	3.10	.42	.64	.29	.49	2.68	2.43
	標準偏差	.37	.39	.44	.40	.50	.48	.45	.50	1.03	.78
私立4年制M	N	135	141	132	141	142	142	142	142	132	134
	平均値	3.27	3.54	3.36	3.10	.00	.99	.46	.96	2.98	2.56
	標準偏差	.35	.37	.42	.39	.00	.08	.50	.18	1.06	.78
私立4年制N	N	117	119	113	119	122	122	121	122	115	114
	平均値	2.39	3.53	3.24	3.00	.00	.98	.49	.61	2.92	2.34
	標準偏差	.35	.40	.44	.41	.00	.16	.50	.49	1.04	.64
私立短大P	N	106	111	104	112	112	112	111	112	106	103
	平均値	3.01	3.68	3.12	3.02	.00	.99	.33	.71	2.85	2.41
	標準偏差	.45	.38	.42	.39	.00	.09	.47	.46	1.06	.69
私立短大Q	N	124	124	112	124	126	126	126	126	111	112
	平均値	3.02	3.54	3.26	3.21	.00	.98	.52	.62	2.41	2.18
	標準偏差	.43	.42	.44	.39	.00	.13	.50	.49	1.02	.70
私立短大R	N	129	138	131	138	139	139	139	139	126	127
	平均値	2.85	3.75	3.54	3.14	.00	.96	.79	.94	2.20	2.12
	標準偏差	.34	.32	.46	.41	.00	.19	.41	.25	.87	.61
公立O	N	36	69	47	65	74	61	63	74	49	45
	平均値	3.01	3.98	3.40	3.30	.45	.15	.44	.78	2.37	2.22
	標準偏差	.50	.37	.42	.45	.50	.36	.50	.41	1.22	1.02
私立短大S	N	48	49	45	49	49	49	48	49	44	45
	平均値	3.00	3.53	3.35	3.27	.14	.98	.33	.86	2.64	2.16
	標準偏差	.46	.36	.38	.36	.35	.14	.48	.35	.97	.60
合計	N	2041	2105	2019	2104	2130	2117	2111	2129	1941	1936
	平均値	3.02	3.61	3.42	3.06	.29	.79	.48	.62	2.87	2.47
	標準偏差	.47	.41	.46	.43	.45	.41	.50	.49	1.09	.83



▲＝4年制大学
＋＝短期大学

大学の入学偏差値は、1998年の学研調べ。

図2. 大学の入学偏差値と大学評価

6．学生文化と大学評価

それでは、大学生活で重視している活動と、在籍大学に対する評価とのあいだには、何らかの関係がみられるのだろうか。表9でみていこう。この表の見方は、以下のとおりである。たとえばアルバイトについていえば、まず、この活動に対する重視度をもとに、学生をアルバイト志向が低い学生と、高い学生の、2つのグループに分割した。具体的には、アルバイト活動が、学生生活のなかで、「少ししか」あるいは「ほとんど」比重を占めていない、と応えた学生を、ここでは「アルバイト志向が低い学生」と呼ぶことにする。一方、アルバイトが「大部分」または「かなり」の比重を占めている、と応えた学生を、ここでは「アルバイト志向が高い学生」と呼ぶことにする。そこで、アルバイト志向が低い学生について、在籍大学に対する「学業」面での大学評価を、1～5の5段階評定で表せば、その平均値は、3.64であった（対象となった人数は、1170人）。一方、アルバイト志向が高い学生の「学業」面に関する満足度は、3.57であった（対象となった人数は、922人）。そして、それら2つの数字のあいだには、二重不等号の表示があるが、これは、2つの平均値間には、1％水準で有意差がみられたことを示している。同様に、5％水準で有意差がみられた場合には、不等号をつけておいた。つまり、大学のなかでアルバイト文化に浸っている学生たちほど、学業面や教職員に対する大学評価が、有意に低いことを表している。表の見方は、「勉強」、「ダブルスクール」、「サークル」、「趣味」、「友人」、「異性」、についても、同様である。今回、大学時代の活動として取り上げた7項目のなかで、活動場所がキャンパス外になる度合いがもっとも高いのは、ダブルスクールについで、アルバイトであると考えられる。その意味で、外の世界を知るほど、大学での勉学に嫌気がさし、教職員の粗が目立つようになるのか。それとも、大学での授業が面白くないがゆえに、アルバイトに走るのか。その解釈を下すことは、現段階では困難である。しかし、いずれにしろ、この結果は興味深い。

表9．大学生活で重視している活動と大学評価の関係

数字は、大学時代の活動の高低でグループ分けした集団の、大学評価に対する平均値(最高4、最低1)。

大学評価＼大学時代の活動		勉強		ﾀﾞﾌﾞﾙｽｸｰﾙ		ｻｰｸﾙ		ｱﾙﾊﾞｲﾄ		趣味		友人		異性	
		低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高
設備環境	平均値	2.98	<< 3.05	3.01	3.05	2.98	<< 3.10	3.02	3.01	3.00	3.03	2.98	<< 3.04	3.01	3.03
	N	(1054)	(985)	(1901)	(89)	(1443)	(586)	(1139)	(899)	(1086)	(943)	(657)	(1379)	(1359)	(675)
学業	平均値	3.51	<< 3.72	3.61	3.66	3.60	< 3.64	3.64	>> 3.57	3.60	3.63	3.58	< 3.62	3.60	3.62
	N	(1097)	(1006)	(1942)	(93)	(1497)	(588)	(1170)	(922)	(1117)	(972)	(686)	(1409)	(1400)	(692)
友人関係	平均値	3.35	<< 3.50	3.43	3.42	3.35	<< 3.60	3.42	3.43	3.40	<< 3.45	3.28	<< 3.49	3.40	<< 3.47
	N	(1044)	(972)	(1872)	(90)	(1421)	(587)	(1128)	(882)	(1077)	(928)	(647)	(1361)	(1338)	(671)
教職員	平均値	2.99	<< 3.13	3.05	3.09	3.05	3.05	3.07	> 3.03	3.05	3.06	3.04	3.06	3.05	3.05
	N	(1095)	(1007)	(1944)	(91)	(1498	(587)	(1166)	(925)	(1121)	(968)	(688)	(1406)	(1402)	(690)

不等号　　：P＜0.05

二重不等号：P＜0.01

ダブルスクールとアルバイトについては、以上の点を除けば、それらへの志向の強さと、大学評価のあいだに有意な差は認められない。つまり、当然の結果とはいえ、キャンパス外活動の重視は、大学評価を低めることは

あっても、高めることはないといえる。これに対し、それら以外の活動、すなはちキャンパスライフとして成り立つ活動は、少なくとも大学における友人関係への評価を高める効果をもっている。以下、1％以下の水準で有意差のあるもの（二重不等号のついているもの）についてみていこう。サークル活動志向の学生と、趣味志向の学生との相違は、前者の「大学の設備環境」への評価の高さにある。「一般的な友人志向」の学生と「異性との交際志向」の学生についても、同様の相違がみられる。サークル活動は、ある意味では、趣味が学生文化のなかで制度化された形態である、とみなすことができる。このように考えれば、調査票をとおして質問している「趣味」とは、正確にいえば、「サークルにのらない趣味活動」ということになる。一般的な友人との友好を深めたり、サークルを行うための施設設備は、大学のなかにある程度、確保されている。しかし、当然のことながら、異性（恋人）との交際や、サークルにのらない独自の趣味に、利用することが可能なキャンパスアメニティは、大学のなかでは整えにくい。この点が大学の施設設備に対する評価を分けている可能性も考えられる。

勉強文化志向の強い学生は、全ての面について大学への評価が高い。とくに教職員に対する評価が高いのは、このグループだけであることは、特筆に値する。それゆえ、このタイプの学生は、基本的には「まじめな」学生である可能性が高いと考えられる。

7．高校時代に行った活動と大学での学生文化

それでは、高校時代に行った活動と、大学生活で重視している活動のあいだには、連続性がみられるのだろうか。たとえば、武内清は、大学生に対するアンケート調査の結果をもとに、つぎのように指摘している。「高校時代にろくすっぽ授業をきかなかった者が大学に入って急にまじめに勉強するようになるという可能性は少ない。また、高校時代にクラブ活動に見向きもしなかった者が、大学の部活動で活躍する可能性も低い。高校時代に異性と無関係であった者は、大学に入って急に異性と親しくなれるわけではない。高校時代に本を読まなかった者は、大学に入ってからも本とは無縁な生活を送る」[8]。つまり、少なくとも、勉学、クラブ（サークル）、異性との交際、読書などの活動に対するコミットメントは、高校時代の生活習慣が、そのまま大学生活に持ち越される、というのである。それでは、今回の調査については、どうであろうか。表 6 で抽出された、高校時代の活動に関する 5 因子と、大学生活で重視している活動の関係をみたものが、表 10 である。表の見方は、表 9 と同じである。たとえば受験勉強についていえば、まず、高校時代にこの活動を、「あまり」あるいは「ぜんぜん」しなかった、と応えた学生を、ここでは「受験勉強志向が低かった学生」と呼ぶことにする。一方、受験勉強を「かなり」または「まあ」した、と応えた学生を、ここでは「受験勉強志向が高かった学生」と呼ぶことにする。そこで、受験勉強志向が低かった学生が、大学に入って、どの程度、勉強中心の生活を送っているかを、1～4の4段階評定でみれば、その平均値は 2.32 であった。一方、高校時代に受験勉強志向が高かった学生について、同様の平均値を算出すれば、それは 2.61 となった。そして、そのあいだには、1％水準で有意な差が認められる。つまり、高校時代に受験勉強に精を出した学生は、そうでない学生に比べて、大学に入っても、勉学中心の生活を送る傾向がみられる。

表10．高校時代に行った活動と大学で重視している活動との関係

数字は、高校時代の活動の高低でグループ分けした集団の、大学時代に重視している活動に対する平均値(最高3、最低1)。

大学活動＼高校時代の活動		交遊		奉仕活動		ｱﾙﾊﾞｲﾄ		受験勉強		趣味	
		低	高	低	高	低	高	低	高	低	高
勉強	平均値	2.53	2.47	2.46	2.61	2.52 <<	2.35	2.32 <<	2.61	2.38 <<	2.62
	N	(640)	(1480)	(1804)	(315)	(1625)	(493)	(900)	(1219)	(1223)	(896)
ﾀﾞﾌﾞﾙｽｸｰﾙ	平均値	1.20	1.20	1.19	1.22	1.20	1.20	1.20	1.20	1.20	1.20
	N	(627)	(1424)	(1744)	(307)	(1581)	(469)	(861)	(1189)	(1182)	(868)
ｻｰｸﾙ	平均値	1.81	1.89	1.87	1.84	1.94 >>	1.62	1.74 <<	1.96	1.88	1.86
	N	(633)	(1469)	(1788)	(313)	(1617)	(483)	(889)	(1212)	(1214)	(887)
ｱﾙﾊﾞｲﾄ	平均値	2.22 <<	2.37	2.33	2.29	2.24 <<	2.58	2.25 <<	2.58	2.34	2.30
		(635)	(1475)	(1793)	(316)	(1622)	(486)	(894)	(1215)	(1219)	(890)
趣味	平均値	2.52	2.49	2.49	2.55	2.51	2.47	2.51	2.49	2.32 <<	2.74
	N	(636)	(1470)	(1792)	(313)	(1618)	(486)	(891)	(1214)	(1215)	(890)
友人	平均値	2.64 <<	2.90	2.80 <<	2.98	2.79 <<	2.95	2.83	2.82	2.82	2.84
	N	(636)	(1476)	(1795)	(316)	(1620)	(490)	(895)	(1216)	(1220)	(891)
異性	平均値	1.73 <<	2.21	2.01 <<	2.34	1.98 <<	2.33	2.11	2.03	2.06	2.06
	N	(635)	(1474)	(1792)	(316)	(1620)	(487)	(893)	(1215)	(1217)	(891)

不等号　　：P＜0.05
二重不等号：P＜0.01

さらに、高校時代に友人との交遊活動に勤しんでいた学生は、大学に入っても、同性、異性を問わず、友人関係志向が強い。同様の連続性は、アルバイトや趣味についてもみられる。奉仕活動については、今回の調査では、大学時代に対応する項目がないので、高校時代との連続性は分からない。ただし、大学入学後に、同性、異性を問わず、友人関係志向が強まっていることが、確かめられる。そのほか、大学に入ると、高校時代に交遊志向の強かった学生はアルバイトに、受験勉強志向の強かった学生はサークルに、趣味志向の強かった学生は勉強に、時間を振り向ける傾向もみられる。ところで、ここでも特異な傾向が観察されるのが、高校時代のアルバイト経験である。具体的にいえば、高校時代にアルバイト文化に浸っていた学生ほど、大学時代には、友人関係志向は高まる。しかし、勉強やサークルを大学生活の中心から遠ざける傾向がみられる。つまり、高校時代のアルバイト経験は、大学学生文化のなかでは、友人志向を除けば反キャンパス的性格を高めることが、示唆される。

8．学年進行との関係

上では、たとえば、高校時代に（受験）勉強中心の生活を過ごしてきた生徒は、大学に入っても、勉強に重点を置いた生活を送る傾向があることをみてきた。それでは、その傾向は、学年が進むと同時に、強まっていくのだろうか、弱まっていくのだろうか。そして、そこには、どの大学にも共通した傾向がみられるのだろうか。それとも、大学ごとに異なるパターンがみられるのだろうか。その点を確かめるために作成した表が、表 11 である。最初に、勉強志向を例にとって、表の見方を説明しておこう。たとえば、A大学では、高校時代に受験勉強に力を注いだ学生（高校時代に受験勉強を「かなり」または「まあ」した応えた学生）は、80.7 %いた。彼ら

のうち、大学下級学年（１～２年生）でも、勉強中心の大学生活を送っている学生（勉強が、大学生活のなかで、「大部分」または「かなり」の比重を占めている、と応えた学生）は、64.2 %に達する。これが、大学上級学年（３～４年生）になると、その比率は、100 %にまで上昇する。一方、Ａ大学では、高校時代に受験勉強に力を注がなかった学生（高校時代に受験勉強を、「あまり」あるいは「ぜんぜん」しなかった、と応えた学生）のなかで、大学下級学年では、勉強中心の大学生活を送っている学生の比率は、33.3 %に過ぎない。ところが、これが、大学上級学年になると、その比率は、75.5 %にまで上昇する。つまり、Ａ大学では、高校時代に受験勉強に力を注いだ学生も、注がなかった学生も、学年が上がるとともに、勉学志向が上昇している。この意味で、Ａ大学には、勉学中心の学生文化を育むカレッジ・インパクトがある、と考えられる。表では、各セルの右端に、矢印が表示してあるが、これは、大学下級学年から上級学年に移行するにともない、勉強志向が高まる傾向がみられるか、低下する傾向がみられるか、横ばいの状態であるかを、矢印の向きで示したものである（それぞれ↑、↓、→で示してある）。こうしてみると、勉学に対するカレッジ・インパクトのあり方は、大学によって異なることが分かる。つまり、第１のグループとして、Ａ大学と同様に、Ｅ、Ｐ大学など、勉学志向を高める雰囲気をもった大学が存在する[9]。しかし、それとは逆に、第２のグループとして、Ｂ大学のように、学生全体の勉学志向を減じる雰囲気をもった大学もある。さらに、第３のグループとみなせるのは、Ｆ、Ｋ、Ｌ、Ｓ大学である。これら大学では、高校時代に受験勉強に力を注いだ学生は、大学生活が進むにつれて、勉学意欲を喪失していくのに対し、高校時代に受験勉強に力を注がなかった学生は、大学で学年が上がるとともに、勉学意欲が高まっていき、学生全体としては、中間地点に収束、均質化していく傾向がみられる。その逆の傾向がみられるのが、Ｄ、Ｊ、Ｍ大学である。これら第４のグループでは、高校時代の（受験）勉強習慣をそのまま反映する形で、大学の学年が上がるにしたがって、学生が二極分化していく傾向がみられる。

表 11. 大学別、学年別にみた学生文化の繁栄度

表注）　数字は、各活動を重視している学生の比率。

(1)勉強志向

大学(高校時代に受験勉強に力を注いだ学生の比率)	高校時代に受験勉強に力を注いだ学生	高校時代に受験勉強に力を注がなかった学生
	下級学年→上級学年	下級学年→上級学年
国立４年制A(80.7%)	64.2→100.0% ↑	33.3→75.0% ↑
国立４年制B(64.2%)	61.9→30.0% ↓	55.6→28.6% ↓
国立４年制E(67.3%)	43.8→44.4% ↑	24.3→30.0% ↑
国立４年制D(74.8%)	29.5→46.2% ↑	31.3→25.0% ↓
私立４年制F(77.1%)	71.6→57.7% ↓	53.3→64.3% ↑
私立４年制G(64.4%)	44.1→45.0% →	55.3→32.4% ↓
私立４年制I(67.6%)	61.1→40.0% ↓	50.0→50.0% →
私立４年制J(51.8%)	63.3→69.0% ↑	47.8→18.8% ↓
私立４年制k(38.5%)	70.4→60.0% ↓	43.2→50.0% ↑
私立４年制L(44.1%)	63.5→46.2% ↓	47.6→66.7% ↑
私立４年制M(62.0%)	54.4→73.3% ↑	69.8→63.6% ↓
私立短大P　(35.7%)	36.4→83.3% ↑	40.6→83.3% ↑
私立短大S　(29.2%)	40.0→21.4% ↓	20.0→25.0% ↑

(2)アルバイト志向

大学(高校時代にアルバイトに力を注いだ学生の比率)	高校時代にアルバイトに力を注いだ学生	高校時代にアルバイトに力を注がなかった学生
	下級学年→上級学年	下級学年→上級学年
国立４年制D(14.9%)	70.0→58.3% ↓	36.0→47.3% ↑
私立４年制F(14.4%)	53.3→61.5% ↑	37.3→47.2% ↑
私立４年制G(14.9%)	33.3→42.7% ↑	41.5→40.6% →
私立４年制J(26.5%)	58.3→61.1% ↑	40.0→48.8% ↑
私立４年制K(22.1%)	36.4→60.0% ↑	32.7→36.4% ↑
私立短大P (42.9%)	40.7→28.6% ↓	14.3→10.3% ↓

(3)趣味志向

大学(高校時代に趣味に力を注いだ学生の比率)	高校時代に趣味に力を注いだ学生	高校時代に趣味に力を注がなかった学生
	下級学年→上級学年	下級学年→上級学年
国立４年制B(34.8%)	61.5→45.0% ↓	12.5→12.4% →
国立４年制E(28.6%)	37.2→53.8% ↑	20.3→26.7% ↑
国立４年制D(45.9%)	57.1→61.0% ↓	37.5→28.9% ↓
私立４年制F(51.7%)	62.3→51.3% ↓	41.9→48.1% ↑
私立４年制G(41.3%)	56.9→41.2% ↓	31.5→34.9% ↑
私立４年制J(55.3%)	64.5→58.3% ↓	40.9→52.0% ↑
私立４年制K(50.0%)	57.6→56.3% →	41.9→43.8% →
私立４年制L(49.6%)	71.4→54.5% ↓	24.4→45.5% ↑
私立４年制M(40.1%)	63.4→66.7% ↑	22.9→33.3% ↑
私立短大P (44.1%)	52.6→63.3% ↑	36.6→25.0% ↓
私立短大S (30.6%)	14.3→64.3% ↑	27.3→11.1% ↓

(4)友人志向

大学(高校時代に交遊関係に力を注いだ学生の比率)	高校時代に交遊関係に力を注いだ学生	高校時代に交遊関係に力を注がなかった学生
	下級学年→上級学年	下級学年→上級学年
国立４年制D(79.6%)	66.0→70.1% ↑	66.7→44.4% ↓
私立４年制F(67.2%)	81.4→81.3% →	63.0→44.4% ↓
私立４年制G(54.4%)	74.5→60.0% ↓	54.9→71.7% ↑
私立４年制J(56.1%)	70.4→70.3% →	46.2→70.8% ↑
私立短大P (42.9%)	40.7→28.6% ↓	14.3→10.3% ↓

同様に、アルバイト志向文化、趣味志向文化、友人志向文化の促進、抑制のパターンも、個別大学ごとに、様々な様相がみられる。つまり、学生の行動習慣は、学生生活を重ねるうちに、個別大学ごとのカレッジ・インパクトの結果として、強化されたり、抑制されたりしていくものと考えられる。

9. まとめ

最後に、まとめを行っておこう。

第1に、大学生活のなかで、どういった活動を中心的に行うか、これが大学学生文化の指標になるとすれば、4年制大学と短期大学では、いくぶん異なる学生文化が形成されていた。しかし、4年制大学のなかでみれば、入学偏差値などに代表される、大学入学段階で決定されてしまう大学属性は、各大学で優勢を占める学生文化に影響を与えていなかった。一方、学生が自身の通う大学に下した評価については、入学当初には、大学偏差値が高い大学ほど、自分が属する大学を高く評価する傾向がみられた。しかし、その傾向は、学生生活が長くなるほど、解消されていく。つまり、その意味で、個別大学ごとに独自の学生文化が形成されていくことが分かる。高校生徒文化の大きな一つの特徴として、高校の学校階層上の位置が上がるほど、勉強文化志向が強くなるなど、学校階層とそこで形成される生徒文化のあいだには、関係があるとされる。しかし、入学偏差値や第1志望入学者の比率などで、一般的に表現される意味での大学の序列と、各大学で優勢をしめる大学学生文化には、顕著な対応関係はみられなかった。この意味で、大学学生文化は、高校生徒文化と形成のされ方が異なることが示唆される。

第2に、大学に対する評価は、学生がどの種の学生文化に帰属しているかによって、差異がみられた。ダブルスクールやアルバイトといった、キャンパス外活動文化へのコミットメントは、大学評価を低めることはあっても、高めることはない。これに対し、キャンパスライフとして成り立つ活動は、少なくとも一部、大学評価を高める効果をもっている。この意味で、キャンパスライフ活動の育成は、大学にとって重要な課題になることが、示唆される。いずれにしても、学生による大学評価は、入学偏差値などに代表される大学属性より、大学入学後に主にどのような活動に従事するかによって決定される部分が大きい。

ただし、大学側が、キャンパスライフ活動の受け皿を、どの程度、用意しているかは、当然、大問題となる。しかし、今回の調査では、大学側のキャンパスライフ育成体制までは、扱うことができなかった。また、本論で、大学属性として取り上げた指標のほとんどは、大学の入学偏差値を除けば、今回行った調査の集計結果をもとにしたものであった。つまり、内部完結のそしりをまぬがれない。それゆえ、より正確な分析を行うためには、客観的な大学・学科情報を指標として取り込み、それらとの関連をみていく必要があると思われる。今後の課題にしたい。

第3に、一般的には、高校時代に行った活動と、大学生活で中心的に行っている活動のあいだには、連続性がみられた。その意味で、高校時代の生活態度が、大学時代の生活態度を仲介することによって、大学評価を規定している部分があることになる。ただし、個別大学ごとにみていくと、学生生活が長くなるほど、高校時代の生活態度を強化していく大学もあれば、逆にそれを抑制していく傾向がみられる大学も存在した。つまり、学生の生活態度に、各大学がどのようなカレッジ・インパクトを与えるか、その影響の仕方は、個別大学ごとに差異がみられた。大学がもつ、どういった要素が、大学生の生活態度形成を規定しているのか。それを明らかにすることこそ、今後に残された最大の課題になると思われる。

<注>

1) 代表的な研究をごく少数だけ以下に列記しておく。

a)野村哲也「都市高校生の生活態度と価値観」、『教育社会学研究』第 22 集、1976 年。

b) 耳塚寛明「生徒文化の分化に関する研究」、『教育社会学研究』第 35 集、1980 年。

c)武内清・苅谷剛彦・浜名陽子「学校社会学の動向」、『教育社会学研究』第 37 集、1982 年。

d)岩木秀夫・耳塚寛明（編）『現代のエスプリ　195 高校生』、至文堂、1983 年、PP.10-12。

2) 丸山文裕「大学生の就職企業選択に関する一考察」、『教育社会学研究』第 36 集、1981 年。

3) Astin, Alexander W., *What Matters in College ?: Four critical years revisited* (San Francisco, CA: Jossey Bass, 1992).

4) 武内清「学生文化の規定要因に関する実証的研究― 15 大学・4 短大調査から―」、『大学論集』第 29 集、1995 年。

5) なお、調査票原本とは、高低の表記の仕方を逆に変えてある。表 8 についても、同様である。

6) 注 1)参照。

7) 今回のサンプル全体の学年構成は、つぎのとおりである。4 年制大学については、1 年生 23.7%（402 人）2 年生 36.8%（623 人）、3 年生 30.0%（508 人）、4 年生 8.6%（145 人）、5 年生以上 1.0%（17 人）。短期 大学については、1 年生 47.1%（200 人）、2 年生 52.9%（225 人）。しかも、大学によって、その学年構成は、大きく異なっている。カッレジ・インパクト研究の前提は、学年進行とともに学生の態度、行動が変容することにある。また、事実、それを裏づける多くの知見が得られている (例えば、前掲、Astin、1992 年など)。したがって、大学ごとにサンプル主体となった学年が異なる点が影響して、今回の調査では、大学の属性と、学生文化や大学評価とのあいだに本来なら存在するはずの関係が、消えてしまったことも考えられる。そこで、1 ～ 4 年生が、比較的均等にサンプルとなっている、5 つの 4 年制大学を抽出して、大学別に、学年と、学生文化や大学評価との関係を調べてみた。さらに、今回、調査対象とした 3 つの短大は、いずれも、ある一定量の 1 ～ 2 年生が、サンプルとして含まれているので、それらについても、同様の分析を行ってみた。その結果を示したものが、図 3 である。これら 8 大学についてみれば、ほぼ例外なく、どの大学でも、学年が上昇するにつれて、大学の設備環境に対する満足度は減少している。しかし、この点を除けば、個別大学ごとに、学年と、学生文化や大学評価とのあいだには、さまざまな関係が観察される。この点こそ、個別大学ごとにカレッジ・インパクトの様相は異なることを示している。逆の言い方をすれば、大学偏差値など、大学入学段階で決定されてしまうような大学属性要因は、学生文化、学生の大学評価に、それほど大きな影響を与えないことの証左になるものと考えられる。

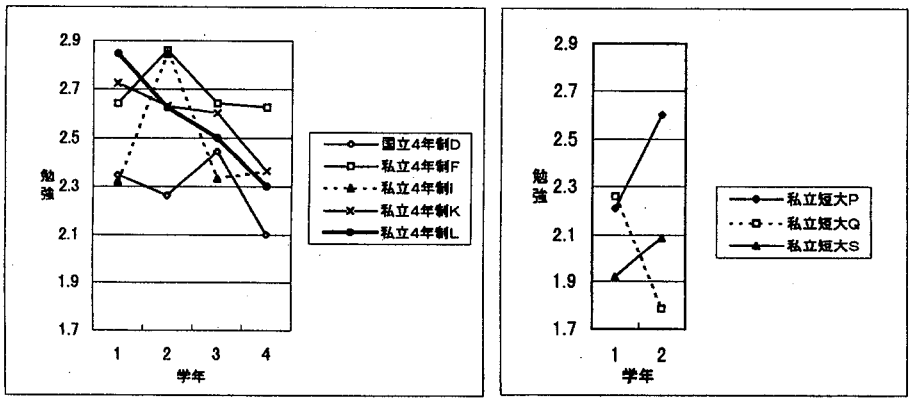


図3. 勉強志向の学年年次変化

8) 武内清「高校生活と大学生活の関連」、『モノグラフ・高校生 ’82』vol. 7、福武書店、1982年、P.41。
9) たとえば、P短期大学の場合は、そこの教員の話によれば、上級学年（2年生）になると、数多くの実習が入り、それにかなりの時間を割かねばならないため、「勉強」以外の活動を行なう暇がほとんどない、とされる。それゆえ、下級学年（1年生）段階に比べ、勉強中心の大学生活を送っている、と答えた学生の比率が上昇した、とも考えられる。つまり、このような制度的な側面が、学生文化のあり方を規定している可能性も存在することを、ここで指摘しておきたい。

付記：本論文は、平成8～12年度文部省科学研究費補助金（基盤研究(C)）「学生文化の実態、機能に関する実証的研究」（研究代表者：武内清）の研究成果の一部をなす。

The Comparative study of College Student Culture in Japan

Kozo Iwata (Musashino Women's University)

We can observe different college student culture being formed by each college and university. Are there any relationships between some characters of colleges and student culture formed there? Here, tow important points emerge especially in Japanese situation. First is college ranking, because many studied about high school student culture showed high school ranking affected the mode of it in each school. Second is college impact. Then the primary aim of this paper is to clarify what factors affect difference of college student culture formed among each college and university. For this purpose we gathered data by questionaires to students at fifteen universities and four junior colleges in Japan.

Main findings of this study are as follows:

(1) Junior college students formed different student culture from university students: the former had strong orientation to friendship, date with other sex, and part-time job; the later had strong orientation to studying.

(2) College ranking scarcely affected the mode of college student culture in each college and university. This suggests its formation process is different from high school student culture.

(3) Each student's lifestyle at high school age was apt to continue in college life.

(4) Moving up from junior class to senior class, students changed their lifestyle. However, this direction varied among each university. For example, while some university enhanced academic student culture, others decreased it. This suggests each college and university has their own unique college impact.